

モンテッソーリ園における野菜栽培活動の効果

保田 恵莉

序

イタリアの医学博士マリア・モンテッソーリは、『モンテッソーリメソッド』明治図書（1986）第10章「教育における自然」のなかで、「（生産）園芸は子どもの教育の基礎である」ことを語り、具体的には「子どもは生命現象の観察と自己教育により、先入先を得るように導かれること」そして、「幼な子は農産物に尊敬の念を持ち関わるが、それは観察する教師が子どもの前に立つのと同じ関係である」ことを示している。また、「人間は自然の一部であり、子どものときには心身の発達にとって必要な力を自然から引き出さなければならないこと」を語り、自然との触れ合いが子どもにとって非常に重要であることを示唆した。

これらの知見の先行研究から、筆者はモンテッソーリ園での野菜栽培活動にかかわったことをテーマに挙げた。特に4歳児～5歳児の野菜栽培活動を2年間継続し観察し、保育者からの子どもへのかかわり調査を行っている。

本稿では、子ども達が、どのように野菜栽培に関わっていくことができたか、また、育てていく過程で人の気持ちを感じる事が出来たか、また、野菜栽培においては、食べ物を作ってくれる人への感謝の気持ちの芽生えがどのように見られたか等、新教育要領・保育指針等の改訂を参考にし、子どもの体験を通しての活動効果を省察した。同時に、マリア・モンテッソーリがこどもの実生活に即した環境から自然環境の尊さを語っている点を重んじながら論じた。

結果、野菜栽培の体験は子どもの好奇心や探究心を高めるだけでなく、子どもの発見から栽培の楽しさに気付き、野菜に生命を実感すること、さらに食育の点からも効果的であることを再認識できた。一般の保育所・幼稚園・認定こども園とモンテッソーリ園の違いはあるが、今後、日本の国では、各園の年間保育活動計画に、栽培活動を積極的に取り入れていくと望ましいと思われる。

I. 研究の目的

1. 野菜栽培活動の意義

改訂された『幼稚園教育要領』や、新たに定められた『保育所保育指針』においては、「身近な動植物に親しみを持って接し、生命の尊さに気付き、いたわったり、大切にしたりする¹⁾」「作物を育てたり、味わうなどして、生命の尊さに気づく²⁾」などと記されている。これらは、野菜の栽培活動が、幼児にとって大切な体験であることがわかる一文である。

また、野菜の栽培を行う体験は、「食育」の観点からも重要である。最近、幼児期における「食育」が重視され、『幼稚園教育要領』の「健康」には「健康な心と体を育てるためには食育を通じた望ましい食習慣の形成が大切であることを踏まえ、幼児の食生活の実情に配慮し、和やかな雰囲気の中で教師や他の幼児と食べる喜びや楽しさを味わったり、様々な食べ物への興味や関心を持ったりするなどし、進んで食べようとする気持ちが育つようにすること³⁾」が新たに付け加えられた。『保育所保育指針』においても、今回、新たに「食育の推進」に関する項目が盛り込まれ「子どもが生活と遊びのなかで、意欲を持って食に関わる体験を積み重ね、食べることを楽しみ、食事を楽しみ合う子どもに成長していくことを期待するものであること⁴⁾」と記されている。下記は、2018年(平成30年)4月1日より施行された幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領の3歳以上の「健康」領域である(図表:3法令比較表)。条文の下線は、内容上の変更があった箇所『一部』である。(漢字からひらがなへの記述の仕方の変更などは記載していない)

【図表：3法令比較表】

幼稚園教育要領	保育所保育指針	幼保連携型認定こども園
健康 健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う。 I ねらい (1) 明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう。 (2) 自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする。 (3) 健康、安全な生活に必	ア 健康 健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う。 (ア) ねらい ① 明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう。 ② 自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする。 ③ 健康、安全な生活に必	健康 健康な心と体を育て、自ら健康で安全な生活をつくり出す力を養う。 I ねらい (1) 明るく伸び伸びと行動し、充実感を味わう。 (2) 自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする。 (3) 健康、安全な生活に必

要な習慣や態度を身に付け、見通しをもって行動する。

2 内容

- (1) 先生や友達と触れ合い、安定感をもって行動する。
- (2) いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。
- (3) 進んで戸外で遊ぶ。
- (4) 様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む。
- (5) 先生や友達と食べることを楽しみ、食べ物への興味や関心をもつ。

<略>

3 内容の取扱い

- (1) 心と体の健康は、相互に密接な関連があるものであることを踏まえ、幼児が教師や他の幼児との温かい触れ合いの中で自己の存在感や充実感を味わうことなどを基盤として、しなやかな心と体の発達を促すこと。

<略>

- (3) 自然の中で伸び伸びと体を動かして遊ぶことにより、体の諸機能の発達が促されることに留意し、幼児の興味や関心が戸外にも向くようにすること。その際、幼児の動線に配慮した園庭や遊具の配置などを工夫すること。 <略>
- (4) 健康な心と体を育てるためには食育を通じた望ましい食習慣の形成が大切であることを踏まえ、幼児の食生活の実情に

要な習慣や態度を身に付け、見通しをもって行動する。

(イ) 内容

- ① 保育士等や友達と触れ合い、安定感をもって行動する。
- ② いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。
- ③ 進んで戸外で遊ぶ。
- ④ 様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む。
- ⑤ 保育士等や友達と食べることを楽しみ、食べ物への興味や関心をもつ。

<略>

(ウ) 内容の取扱い

- ① 心と体の健康は、相互に密接な関連があるものであることを踏まえ、子どもが保育士等や他の子どもとの温かい触れ合いの中で自己の存在感や充実感を味わうことなどを基盤として、しなやかな心と体の発達を促すこと。

<略>

- ③ 自然の中で伸び伸びと体を動かして遊ぶことにより、体の諸機能の発達が促されることに留意し、子どもの興味や関心が戸外にも向くようにすること。その際、子どもの動線に配慮した園庭や遊具の配置などを工夫すること。 <略>
- ④ 健康な心と体を育てるためには食育を通じた望ましい食習慣の形成が大切であることを踏まえ、子どもの食生活の実情に

要な習慣や態度を身に付け、見通しをもって行動する。

2 内容

- (1) 保育教諭等や友達と触れ合い、安定感をもって行動する。
- (2) いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。
- (3) 進んで戸外で遊ぶ。
- (4) 様々な活動に親しみ、楽しんで取り組む。
- (5) 保育教諭等や友達と食べることを楽しみ、食べ物への興味や関心をもつ。

<略>

3 内容の取扱い

- (1) 心と体の健康は、相互に密接な関連があるものであることを踏まえ、園児が保育教諭等や他の園児との温かい触れ合いの中で自己の存在感や充実感を味わうことなどを基盤として、しなやかな心と体の発達を促すこと。

<略>

- (3) 自然の中で伸び伸びと体を動かして遊ぶことにより、体の諸機能の発達が促されることに留意し、園児の興味や関心が戸外にも向くようにすること。その際、園児の動線に配慮した園庭や遊具の配置などを工夫すること。 <略>
- (4) 健康な心と体を育てるためには食育を通じた望ましい食習慣の形成が大切であることを踏まえ、園児の食生活の実情に

慮し、和やかな雰囲気の中で教師や他の幼児と食べる喜びや楽しさを味わったり、様々な食べ物への興味や関心をもったりするなどし、食の大切さに気付き、進んで食べようとする気持ちが育つようにすること。

(5) 基本的な生活習慣の形成に当たっては、家庭での生活経験に配慮し、幼児の自立心を育て、幼児が他の幼児と関わりながら主体的な活動を展開する中で、生活に必要な習慣を身に付け、次第に見通しをもって行動できるようにすること。

配慮し、和やかな雰囲気の中で保育士等や他の子どもと食べる喜びや楽しさを味わったり、様々な食べ物への興味や関心をもったりするなどし、食の大切さに気付き、進んで食べようとする気持ちが育つようにすること。

(5) 基本的な生活習慣の形成に当たっては、家庭での生活経験に配慮し、子どもの自立心を育て、子どもが他の子どもと関わりながら主体的な活動を展開する中で、生活に必要な習慣を身に付け、次第に見通しをもって行動できるようにすること。

慮し、和やかな雰囲気の中で保育教諭等や他の園児と食べる喜びや楽しさを味わったり、様々な食べ物への興味や関心をもったりするなどし、食の大切さに気付き、進んで食べようとする気持ちが育つようにすること。

(5) 基本的な生活習慣の形成に当たっては、家庭での生活経験に配慮し、園児の自立心を育て、園児が他の園児と関わりながら主体的な活動を展開する中で、生活に必要な習慣を身に付け、次第に見通しをもって行動できるようにすること。

この3法令では、3歳以上の子どもの教育においては「育みたい資質・能力」及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」(10の姿)の考え方や「領域」、「内容」、「内容の取り扱い」等の表記を「共通化」させたところに特徴がある。また、全てが同じ表記でない箇所もあるのが、内容面では完全一致と考えることができる。また、いずれも「次第に見通しをもって行動できる子どもを育てたい」という願いを持っていることが明確である。

本稿は、新しい保育・教育の視点を持ちながら、Mモンテッソーリ園の実践及び保護者へのアンケート調査から、野菜の栽培体験が子どもに及ぼす効果について考察し、効果的な保育における栽培活動への取り組みに対する方向性を見出そうとするものである。幼児期において特に日々の食生活でなじみの深い野菜の栽培は幼児にとって貴重な体験になることは予想できる。しかし、家庭内で栽培を行うことは、住宅事情や時間や手間、親自身の経験や関心のなさなどから保護者も困難を感じているようである。

今回の調査では、保育・教育の根幹となるのは「教育の主体は子どもである」という調査対象のMモンテッソーリ園の考え方に着目し、野菜栽培活動の場面に何度か出会い、モンテッソーリ教師の教育観にも触れていった。Mモンテッソーリ園では、教育の主体を子どもに置き、子どもが自発的に自らやりたいところを選んですることに重点を置いている。それらを総合し考察していくと、

園において子どもたちに野菜栽培活動の体験をさせることには、大きな意義があることが理解できる。

II. Mモンテッソーリ園での保育・教育の在り方

モンテッソーリ教育は、イタリアの女性医学博士「マリア・モンテッソーリ」が築き上げた教育法であり、彼女は「教育の主体は子どもである」ということを大前提に様々なことを試み、大きな成果を挙げている。日本では、近年、将棋で大記録を打ち立てた藤井四段(当時)が幼児期にモンテッソーリ園に通い、モンテッソーリ教育を受けていたことでも話題となった。では、モンテッソーリ園で教師はどのような教育の考えを基に保育を行っているかと言うと、次のようなことが浮かび上がってくる。

まず、一点目は、キリストの思想を持ち、歩んでいるMモンテッソーリ園であり、神様は一人一人の子どもを愛され「命」をくださったこと。イエスの母であるマリア様と共に教師は、一人一人の子どもは神様に愛され生まれてきたかけがえのない存在であることを保育のなかで伝えている。

障害を持つ子どもも、そうでない子どもも、個人の存在を十分認めあう温かい環境のなか、イエス様の教え通り、園では、友達を思いやり仲良く過ごすように導かれている。

そして、二点目には、心が一番動くこの幼児期こそ豊かな感性の育む時であることを重んじている。豊かな自然と関わり、植物を育てたり、農作物を収穫したり、虫を捕まえたり、花の匂いをかぐ等、直接に自然に触れ、五感に働きかける毎日の生活が幼児の心と感性を育てている。

それから、三点目には、下記のような循環のなかから自立心を養っていることが挙げられる。幼児の姿をしっかり捉え、その子どもの自発性を尊重し、一人一人が豊かに自立・成長していく手助けをする教育方法である。それは、上から教え込む「学習」ではなく、いま、その子どもの興味に添い、様々な教具や教材を使うことにより子ども自身が豊かになっていくよう、モンテッソーリ教師が手伝いすることを「教育」と発している。

「お仕事(遊び)」の時間では、各教室に意図的に整えられた教具から『自由に選んで遊ぶ→繰り返す→集中する→達成感、満足感を味わった子→他児に伝えていく』、この環境のなかから自立心が培われ 優しい子どもへと育っていくのである。



【conceptual scheme：野菜栽培活動を達成する循環のしくみ】

Mモンテッソーリ園参考：保田作図（2019.10.6）

選択とは、自主的にやりたい活動を自分で選ぶことであり、自分で選択した場合、集中しやすく、達成感・満足感が得られる。それらは、繰り返し反復しながら、能力を身につけていく。モンテッソーリ教育では、このような学習サイクルを生活のなかで育んでいる。

Ⅲ. 研究の方法

(1) 対象

Mモンテッソーリ園（日本）、平成30年度4歳児クラス22名、令和元年度5歳児クラス22名の子ども及びその保護者（4歳児～5歳児は持ち上がりクラスであり、調査対象者は変わらない）※研究の予想としては、Mモンテッソーリ園では、保護者の協力姿勢が整っているため、アンケート回収率が、一般の園よりも高いと思われる。

(2) 時期

平成30年4月から令和元年9月

(3) 内容・方法

①栽培活動の観察：野菜の苗の植え付けから、日常の世話、収穫、収穫祭（調理保育舎）に参加し、子どもたちの様子を二年の期間、野菜の栽培活動の取り組みを観察した。

②野菜の栽培体験が子どもに及ぼす効果について、一年目4歳児・二年目5歳児クラスの保護者へのアンケート調査を依頼、集計、考察した。

主な質問事項は次のようである。

- A 栽培活動について子どもが家庭でどの程度話をしていたか
- B 栽培した野菜の中で子どもが苦手な野菜について
- C 栽培活動を通して子どもが食べられるようになった野菜について
- D 栽培活動を通して子どもたちの食生活などに何か変化はあったか 等

Ⅳ. 倫理的配慮

本稿について、調査の目的・方法・プライバシーの保護等の説明をMモンテッソーリ園にて行い、調査協力は自由意志であること、また、観察の有無、園で実施されたアンケート回答の提出等、同意が得られるものだけとすることを口頭で説明した。

モンテッソーリ園が特定されないように配慮することを約束した。

Ⅴ. 栽培活動の観察結果

(1) 活動の様子

事前にMモンテッソーリ園にて園長及びモンテッソーリ教師と打ち合わせをし、観察者も栽培活動に自然に加われるようにしながら、協働のなかから観察を実施した。ここでは、二年間の活動の流れを経過～結果に結んでいる。

- ①平成30年度：5月6日・野菜苗の植付け（ピーマン・茄子・トマトをプランターとミニ畑に植える）5月6日～5月30日（こどもだけで相談し、毎日の水やり当番を決め、順番に水やりをする）6月12日～夏休みまで（収穫をし、給食に入れて食べる体験をする）7月18日（収穫祭を行う。4歳児全員で出来た野菜を収穫し、調理保育を行う。保護者約16人が参加した。子どもたちが調理し、調理室で職員が野菜を焼く。みんな一緒に食する）
- ②令和元年度：4月26日・野菜苗の植付け（ピーマン・茄子・トマト・キュウリをプランターとミニ畑に植える）4月26日～5月27日（こどもだけで相談し、毎日の水やり当番を決め、順番に水やりをする。野菜の成長の様子を絵に描く）6月6日～夏休みまで（収穫をし、給食に入れて食べる体験をする）7月14日（収穫祭・5歳児全員で出来た野菜を収穫し、調理保育を行う。保護者約18人が参加した。子どもたちが調理し、調理室で職員が野菜を焼く。

焼いた野菜を3歳児・4歳児に配り、一緒に食べる)

(2) 子どもたちの様子

(平成30年度)

Mモンテッソーリ園での4歳児は、ほとんどの子どもにとって野菜の栽培は初めての体験であった。始めは戸惑いがちであったが、一人がトマト・茄子・ピーマンのいずれか一本ずつ苗を植え、どの子どもも積極的に取り組み、楽しみながら活動していた。

Mモンテッソーリ園では、特に「自分の植えた苗がどのように成長するのか」という点を保育のなかで大切に扱い、探究心や好奇心を培うことができた。植えたばかりの苗を見て、実った野菜の絵を想像でき、絵に描ける子どももいた。一番多く絵に表現された野菜はトマトであり、赤いトマトが鈴なりになり収穫を待っている様子が伝わってきた。

(令和元年度)

5歳児になって、少し時期を早めて野菜栽培活動を体験したが、4歳のときの実体験から自信を得られ、活動の流れは昨年よりもスムーズに行われた。新たにキュウリの苗も植え、収穫には喜びが増した。子ども達はキュウリの雄花と雌花の区別ができるようになり、実が少しずつ大きくなる様子を、周りの人に伝えたい様子が見られた。特に保護者には手を引いて野菜の生長を見せたいという気持ちが見られた。キュウリや茄子にとげがあることを発見して「チクチクしているよ」等と、手の触感に興味をもつ子どももいた。

収穫祭では、全員が積極的に活動し、子どもたちが自分たちで育てた野菜を収穫する喜びを感じている姿が伺えた。

次に、調理保育での子ども達の様子について語ると、サラダ作りに積極的な姿が見られた。まず、担任保育者が絵本「やさいのおしゃべり」を読み聞かせ、調理への興味を促す。次に、調理の手順を説明し、その後、野菜を切って盛り付けるなどの調理を行った。4歳児は野菜を水で洗う係りをし、5歳児は、自分から好きな野菜を手にとって積極的に調理に参加する姿が見られた。野菜を包丁で切るときには保育者が手を出し過ぎてしまう場面もあったが、多くの子どもたちが「ひとりでする」といって一人で包丁を使っていた。

子ども達に「嫌いな野菜はある？」と聞くと「トマト大好き」「キュウリも好き」「ピーマンとナスは嫌いだったけど食べられるようになった」という答えがかえってきた。サラダではドレッシングをつけずに食べている子どももいて、野菜そのものの味を楽しんでいる子どもも多くいた。野菜が苦手な子どもも

だが、一口も食べないということはなく、比較的食べやすいキュウリなどから少しずつ食べている様子が見られた。友だちがおいしそうに食べているのに刺激されている様子も見られた。

調理保育で作ったものは、午後のおやつとして3・4歳児クラスにも「おすそわけ」された。5歳児の子どもたちがグループごとに「採れた野菜で作ったので食べてください」という言葉と共に配膳した。モンテッソーリ・メソッドでは、年上の幼児は年下の幼児を思いやり、年下の幼児は年上の幼児に憧れ、慕うようになる。このときは、下のクラスの子どもたちに「ありがとう」と言われ、5歳児は照れている姿も見られたが、嬉しそうだった。

(3) アンケート調査について

栽培体験をした5歳児クラスの保護者を対象として、野菜の栽培活動から、収穫した野菜を使った調理実習の活動に関するアンケート調査を実施した。平成30年度・令和元年度共に、収穫祭の後の7月下旬に配布し9月に回収した。【回収率：平成30年度21/22(回収数/配布数)、令和元年度22/22、合計配布数は44枚、回収率は97.7%】

アンケートの集計結果は以下の通りである。

①栽培活動について、子どもが家庭でどの程度話をしていたかについて

野菜の栽培活動について、子どもが家庭でどの程度話をしていたかについての結果は、図1の通りである。年度別の内訳は表1のようになっている、「よくしていた」と「時々していた」を合わせると、84.0%の子どもが野菜の栽培活動について家庭で話しており、子どもが興味・関心を持ってかかわっていたことがわかる。また、4歳児と5歳児の野菜栽培活動を比較すると、4歳の時よりも5歳になってからの方が積極的に家庭で話をしている、5歳になってからは、無回答がなかった。これは、アンケートに協力する保護者が同じということからも一年目の体験が次年度の保護者の関心にも繋がっていることを示している。

表1 栽培活動について子どもが家庭でどの程度話をしていたか

年度	よくしていた	時々していた	あまりしていない	全くしていない	無回答	合計
平成30年度	10	7	3	1	1	22
令和元年度	12	8	2	0	0	22
合計	22	15	5	1	1	44

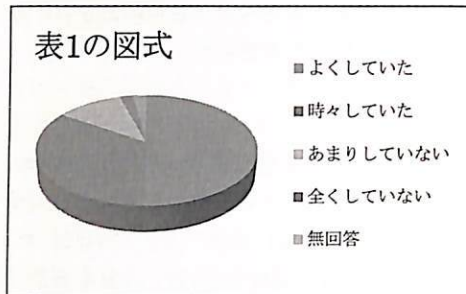


図1 栽培活動について子どもが家庭でどの程度話をしていたか

②栽培活動について、話していた内容

子どもたちは、どのようなことを家庭で話していたのだろうか。自由記述でその内容を記入していただいた主な内容は次の通りである。

<平成30年度>

- ・野菜が育っていく過程での色の変化。
- ・給食に収穫した野菜が出たこと。
- ・子どもが植えた野菜の場所について。
- ・実が大きく育ったのを嬉しそうに話してくれた。
- ・野菜の水やりについて続けてできたこと。
- ・収穫した野菜をクラスで食べたこと。
- ・葉が虫に食われていてビックリしたこと。
- ・トマトに色がついてきた、実が大きくなったこと。
- ・給食に出た収穫したトマトが美味しかった。

<令和元年度>

- ・水やり当番をしたこと、野菜をスケッチしたこと。
- ・きゅうりが大きくなった。
- ・収穫した野菜を食べて美味しかった。
- ・茄子の葉っぱが、こんなに大きくなったよ（手で大きさを表現しながら）

- ・収穫したキュウリを給食で食べたこと。
- ・保育室に置いてあった野菜のこと。
- ・畑に野菜を見に行こうと誘ってくれた。
- ・食卓で同じ野菜を見つけると保育園でも育てていること。
- ・キュウリはチクチクしていること、食べるとおいしいこと。
- ・送り迎えの時、畑に野菜を見に連れて行ってくれた。
- ・葉っぱが増えたこと、花の色のこと、実が大きくなっていくこと。

③栽培した野菜の中で子どもが苦手だった野菜

子どもたちが栽培した野菜は、比較的育てやすい野菜であるトマト・茄子・ピーマン・キュウリであった。全ての野菜は愛着が持てるように子どもの手で苗植えを行った。これらの野菜について、苦手なものについて質問したところ、図2のように、ピーマンが全体の半分子どもが苦手だったことがわかった。同時に、茄子も苦手意識が強いことがわかった。トマト・キュウリは、比較的食べやすい野菜であり、子どもの苦手意識が少ないことがわかった。年度別の内訳は表2の通りである。

表2 栽培した野菜の中で子どもが苦手だった野菜

年度	野菜の種類				合計
	茄子	ピーマン	トマト	キュウリ	
平成30年度	9	12	1	無	22
令和元年度	9	10	1	2	22
合計	18	22	2	2	44

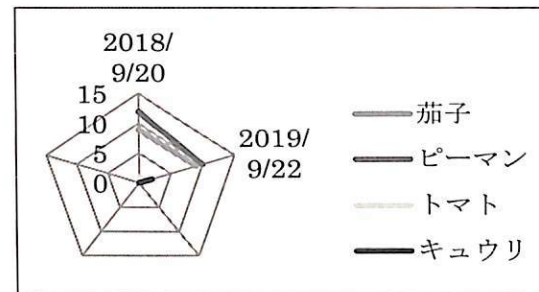


図2 栽培した野菜の中で子どもが苦手だった野菜

④栽培活動を行ったことによって食べることができるようになった野菜

野菜の栽培活動を行い、自分たちで育てた野菜を食べるという体験をした子どもが、こうした活動を行ってから食べることができるようになった野菜は、図3のように、嫌いだった野菜と同じ順位で上位を占めていた。(一日遅れて集計)しかし、注目したいのはその総数である(表3)。表2「栽培した野菜の中で苦手だった茄子」が克服できている。「苦手だったピーマン」も茄子の次に食べることが出来るようになってきている。これは、もともと苦手というほどでもなかったが、進んで食べるようになったことが顕著にみられたと解釈してよさそうである。

表3 栽培活動を行うことによって食べることができるようになった野菜

年度	野菜の種類				合計
	茄子	ピーマン	トマト	キュウリ	
平成30年度	11	10	1	無	22
令和元年度	8	11	1	2	22
合計	19	21	2	2	44

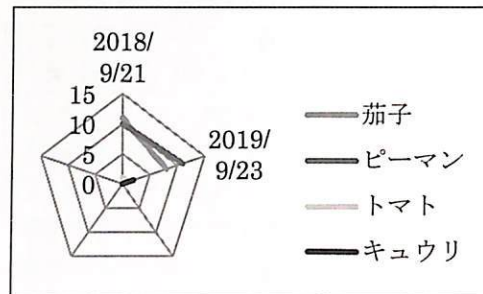


図3 栽培活動を行うことによって食べることができるようになった野菜

⑤活動を通して、子どもたちが食生活や行動に変化があったこと

＜平成30年度＞

- ・嫌いな野菜を自分で育てたことで食べられるようになった。
- ・他の野菜もどのように育つかに興味を持ち、畑を見るようになった。
- ・栽培する以前より野菜が身近になり、積極的に食べるようになった。
- ・苦手な野菜を担当することで食べられるようになった。
- ・料理に興味を持ち、手伝いを進んでやるようになった。

- ・野菜に対して「食べていこう」という気持ちが出てきた。
- ・自分で野菜を食べようとしているようで、少しずつ食べられるようになった。
- ・簡単な調理は積極的にやりたいと言うようになった。
- ・食べ残したら「もったいない」と頑張って食べるようになった。
- ・風邪をひきやすかったが、改善されてきたように思う。

＜令和元年度＞

- ・野菜を切るというお手伝いをしたがるようになった。
- ・調理実習で作ったサラダのトマトを普通に食べていたことに驚いた。「トマト美味しい」と言っていた。
- ・今までは、ピーマンは嫌々食べていましたが、最近は「ピーマン好きになった」と自分で言うようになり、よく食べるようになってきた。
- ・「お弁当に野菜を入れてくれてありがとう」と言ってくれた。
- ・形のいい野菜しか触れたことがなかった子どもが、栽培をきっかけに興味を持って、いろいろな形を見たり、食べたりしてくれるようになった。
- ・嫌いだった茄子が食べられるようになった。
- ・野菜の旬について考えるようになった。
- ・野菜に興味を持ち、家でも栽培するようになった。
- ・野菜を多く食べているせいか、喘息が出なくなってきた。
- ・健康に自信が持てるようになんて変わった。

⑥栽培活動についての感想・意見

＜平成30年度＞

- ・野菜はどうやって出来るのか、栽培することの難しさや楽しさを学べたと思う。
- ・実際に大きくなる野菜を目で見て、直に触れて理解できる場がよかった。
- ・食育という意味で栽培はとてもいいことだと思う。
- ・季節ごとにとれる野菜を育てて、季節ごとの野菜を知ることができると思う。
- ・幼児期に芽生えや生長に触れることは大切なことだと実感した。
- ・自分達で作った野菜を料理して食べることはいい体験。
- ・みんなで野菜を育てる楽しさを感じた様子。
- ・野菜の成長を楽しみにして、世話をすることの大切さが学べて良かった。
- ・野菜本来の美味しさを味わえた。家庭ではなかなか栽培はできないので貴重な体験。

＜令和元年度＞

- ・ 植え付けから栽培して、できた野菜を生で食べたり調理したり食べ物に触れる機会が多くなり、買い物に行くと「この野菜食べたよ」と野菜に親しみを持っている様子。
- ・ 苦手な野菜もみんなで育ててみんなで食べるとおいしいと感じることができ、とても良い経験だと思う。
- ・ 野菜の成長を見ることにより、「食べたい」という意欲が出てきた。
- ・ 買うだけでなく、水・太陽・土のいろいろなものが大切であることを体で感じ、自分達で育てた野菜は美味しいと体験することができた。
- ・ 小さな芽から実が大きくなって食べられるという一連の体験ができ成長に繋がったと感じている。
- ・ 苦手な野菜を食べられるようになり、野菜と共に子どもも親も成長したと思う。

VI. 考察及び今後の課題

Mモンテッソーリ園では、平成30年度・令和元年度共に、全ての子どもたちが野菜栽培活動に積極的に取り組んでいた。栽培活動を通して、水やりや収穫、調理に至るまでの協力関係が深まった。アンケート結果からは、家庭でほとんどの子どもが野菜栽培について話をしており、子どもの関心度が高かったことがわかった。

自分で育てるという体験により、苦手だった野菜も、どんな味がするのか、食べず嫌いを失くすことから、その日食べられなかった子どもも保育者の励ましと見届けにより、「次は食べてみよう」という意欲が湧き、食べるできるようになった。アンケートからは、苦手な野菜を食べられるようになった喜びが溢れていた。

また、保護者が、登園時や降園時に子どもと一緒に野菜の生長を確かめている様子も見られ、親子のコミュニケーションが深まった。収穫祭だけでなく、普段の保育のなかにも保護者が野菜栽培活動を参観・参加できる機会を持っていくことが今後もMモンテッソーリ園への信頼に繋がっていくと考えた。

以上のことから幼児期における野菜栽培活動の体験は、子どもの自然への興味関心を深めると共に、食育や健康面でも効果が高いということが言える。

結

筆者は、大学の授業において保育実習及び保育実習指導を担当している。日本では数少ないモンテッソーリ園での生活・活動について、学生たちの知識にもなればという気持ちもあり、今回は学生にも読みやすくわかりやすい論文になるように、本稿を仕上げた。

2019年（平成29年）3月31日、「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」（以下、3法令とする）を同時に改訂（定）告示され、1年間の周知期間を経て、2018年（平成30年）4月1日より施行された。3つの指針・要領が同時に告示・施行されたのは今回が初めてであり、「幼稚園教育要領」「保育所保育指針」「幼保連携型認定こども園教育・保育要領」の共通化された。

この3法令では、3歳以上の子どもの教育においては「育みたい資質・能力」及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」（10の姿）の考え方や、「領域」「内容」「内容の取り扱い」等の表記を「共通化」させたところは、大きな特徴の一つである。3法令の中で、子ども達に身に付けてほしいことをまとめたものが「ねらい」である。このねらいは、園での生活全体を通じ、幼児が様々な体験を積み重ねる中で相互に関連をもちながら次第に達成に向かうものである。

内容は、ねらいを達成するための事項である。また、幼児が環境に関わって展開する具体的な活動を通して総合的に指導されるものである。（子ども達はそのねらいを身に付けるためには、「何を」を経験すればよいのかというときの「何を」に当たる部分である。）「内容の取扱い」は「内容」に書かれている事項を保育者がどのように援助や配慮をして、経験させていくべきかということが示されている。要するに、内容の取扱いは、幼児の発達を踏まえた指導を行うにあたって留意すべき事項である。

本稿を書き終えて、野菜の栽培の体験は子どもの好奇心や探究心を高めると同時に食育の点からも有効であることが改めて理解された。モンテッソーリは、『幼児の秘密』国土社（2003）の著書のなかで、大人と異なる幼児期の精神の神秘さと精神の法則性を科学的に探究することこそ新しい教育の果たすべき使命であると訴えている。

今回の研究では、保護者がこの活動に喜んで参加し、親子のコミュニケーションを高める効果が得られたこと、更に、4歳・5歳共に、食べ物を作ってくれる人への感謝の気持ちの芽生えが見られた点に感謝し、今後も尊い自然とのか

かわりを大切に、科学的な探求心を持ちながら、幼児の真実の姿を保護者・モンテッソーリ教師と共に探っていきたい。

注

注1：ミネルヴァ書房編集部編（2008）『保育所保育指針 幼稚園教育要領 解説とポイント』pp250-251

注2：厚生労働省編（2008）『保育所保育指針解説書』p85, p230

注3：前掲1 pp247-248

注4：前掲2 pp169, p243

参考文献

M・モンテッソーリ著、安倍真美子 白川蓉子訳 1977『モンテッソーリ・メソッド』明治図書

M・モンテッソーリ著、常良訳 1980『子どもの発見』国土社

M・モンテッソーリ著、鼓常良訳 1981『子どもの秘密』国土社

M・モンテッソーリ著、鼓常良訳 1990『子どもの心—吸収する心』国土社

松野静子著、佐野正監修 2013『よろこびの中に生きるモンテッソーリ教育』国土社

塩野マリ編著（2008）『5歳児の指導計画』ひかりのくに

谷田貝公昭監修、細野一郎編（2004）『保育内容シリーズ 環境 第2版』一藝社

谷田貝公昭監修、高橋弥生編（2018）『健康（コンパクト版保育内容シリーズ）』一藝社

菊池秀範・石井美晴編（2008）『〈新訂〉子どもと健康』萌文書林